

研究成果報告書

(研究代表者(申請者) 北海道博物館 小川正人)

公益財団法人国土地理協会学術研究助成「アイヌ語地名資料データベース」の基盤構築—アイヌ語地名研究者・山田秀三による調査資料を軸にした、古地図・現地調査・地理情報のデータベース化—につき、所定の研究期間を終了いたしましたので、下記のとおり研究経過及び研究成果を報告いたします。

1 研究課題の概要

本研究課題は、北海道をはじめ千島列島、サハリン島中・南部、本州東北地方にかけて濃密に存在するアイヌ語に由来する地名(以下「アイヌ語地名」とします)について、特に北海道・東北北部におけるアイヌ語地名について学ぶための有益な情報資源を構築することを射程に据え、申請者の所属する北海道博物館が所蔵する、アイヌ語地名研究の第一人者・山田秀三による地名調査の記録資料を活かしたアイヌ語地名資料データベースのあり方を検討し、そのモデルを作成することを具体的な目標としました。

1-1 はじめに —課題の意義:「アイヌ語地名について学ぶ」ということ—

アイヌ語地名が、北は千島列島やサハリン島中・南部から南は本州東北地方にかけて濃密に存在することは、アイヌ語で暮らしを営んできた人々がこれらの地域に先住してきたことの何より証左です(本研究とは直接に関連しませんが、山田秀三らの研究によって、アイヌ語地名は遅くとも7~8世紀に本州東北地方に存在していたことも確認されています)。従って、どこにどのようなアイヌ語地名がある(あった)のかを、多くの人が知ること/多くの人に知らせることは、特に日本社会の多数者にとって、先住民族としてのアイヌ民族の存在を、より具体的に、身近に意識できることに繋がる意義を持ちます。

また、アイヌ語地名には、その土地の様子や地理的特徴、その土地や地域に関わる命名当時の生活文化や歴史的記憶・伝承などが反映しているとされるので、アイヌ語地名についての理解を深めることができれば、それはアイヌ文化についての具体的な知見を深めることにも繋がる意義を期待することもできます。

そして、周知のとおり、アイヌ語地名については、特に19世紀から20世紀初頭にかけて、アイヌ民族の居住圏・生活圏を日本やロシアが領有し開発を進めたことにより、アイヌ語地名のほとんどが、アイヌ語で呼ばれていた状態から変容し、地名そのものが喪失された(その地域・社会から忘失された)例も少ないと考えられる、そのような厳しい歴史があります。このようなアイヌ語地名の変容・喪失のあり方には、近現代においてアイヌ民族が置かれてきた状態や、経験してきた歴史が反映しています。したがって、アイヌ語地名について、ただ“昔はそこにあった地名”として知ることや、“アイヌ語での意味は○○○○……とされる”といった知識にとどまらず、現在のその土地・地域と結びつけて、また、変容・喪失のあり方にも科学的な想像力を

めぐらせるようなかたちで知ることができれば、アイヌ語地名から歴史を知る（社会の多数者にとっては「(歴史に) 気付く」というニュアンスが近いかもしれません）ことのいとぐちともなり得る意義も期待できます¹。

本研究課題で申請者筆が目指したのは、こうした意義を念頭に置いて、北海道・東北北部におけるアイヌ語地名を知り・調べ・学ぶための情報検索の基盤を整備することなのです。

1-2 先行研究（従来の「アイヌ語地名解」「アイヌ語地名データベース」）の到達点と課題

本研究課題にとっての先行研究としては、近代以降における、「どこにどのような地名がある（あった）か」を著した諸種の文献を挙げることができます。

その嚆矢と言えるのは、永田方正『北海道蝦夷語地名解』（北海道庁、1891年）です。立項されている地名の件数の多さ（山田秀三によれば「六千数百」）と、地域のアイヌからの聞き取りによると推定できる記述を多く含むことが特色です。永田方正は、1880年代前半に当時の函館県（現在の渡島・檜山及び後志南部）の職員として遊楽部（現八雲町内）に設けられたアイヌ児童を対象とした小学校の教員をつとめ、1883年には近代日本における最初のアイヌ語文法書とされる『北海小文典』（函館県発行）を著すなど、アイヌ語についても相当の知見を有していたとされ、1888年から90年にかけて自ら道内を巡り調査した²ことが、これらの特色の意義をより高めているとされ、現在もアイヌ語地名研究の基本的な参考文献としての位置を占めています。

同書は、北海道内の地名を地域ごと（国・郡ごと）に配列し、アイヌ語ローマ字表記及びカタカナ表記で立項して、その語義や由来などを記述していく構成になっています。このスタイルは、その後の北海道の地名に関する文献³に共通するかたちの一つになっています。

すなわち、その後の比較的早い時期における、まとまった文献である吉田東伍『大日本地名辞書 続編』（富山房、1909年）をはじめ、戦後のものでは更科源蔵『アイヌ語地名解—北海道地名の起源』（北書房、1966年）など、さらにアイヌ民族の歴史や文化に社会の関心がやや寄せられるようになった1970年代以降ではNHK北海道本部（編）『北海道地名誌』（北海教育評論社、1975年）など、さらに比較的近年のものと言える1990年代以降では、榊原正文『データベースアイヌ語地名 1 後志』、『同 2 石狩1』、『同 3 石狩2』、『同 4 日高1』、『同 5 胆振』、『同 6 日高2』（北海道出版企画センター、1997、2002、2004、2011、2014年）、伊藤せいち『アイヌ語地名 1 網走川』、『同 2 紋別』、『同 3 北見』（北海道出版企画センター、1997、2006、2007年）や、北海道環境生活部総務課アイヌ施策推進室（編）『アイヌ語地名リスト』（同進室、2001年）などが、基本的にこの構成で編まれています。

また、『角川日本地名大辞典 1 北海道 上巻』、『同 下巻』（角川書店、1987年）、『日本歴史地名大系 1 北海道の地名』（平凡社、2003年）は、多人数の編著者の分担・共同による厚みのある記述が特色です。いずれも北海道の地名全体を対象としており必ずしもアイヌ語地名だけを主題とするものではありませんが、当然ながらアイ

又語地名に関する記述を豊富に含んでいます。基本的には上記の諸文献と同様の、地域ごとに地名を立項する構成となっています。

これらの文献には、アイヌ語地名に関する学術的知見（アイヌ語の特に文法に関する基本的知見の有無など）と科学性（地名の、特に語義等の検討に際しての推論・可能性の絞り込み等における科学性の担保など）においては個々の研究による凸凹も見られるものの、特に近年のものは、個々の地名に関する限りは、比較的信頼性の高い記述が増えつつあると感じます。また、これらの文献は、地名の検索の利便性が高く、立項されている地名のおおよその位置を把握しやすく、辞典的な使い方に適しています。

反面、特にアイヌ語地名を知る・学ぶ、という見地から見た場合には、次の2つの難点も同居しています。

難点の一つは、アイヌ語地名が実際に指し示した場所や地形と、それが改変されて現在に至っている現在の地名が示す場所や地域には、しばしば大きなズレが生じていることです。

例えば、オタルナイ（小樽市）のように近世に人為的に移動させられた地名や、日高地方の沙流川下流域のいくつかの字名（「平賀」など）のように近代の人為的な集落移動があった地名、室蘭のように近代における和人による市街地形成に伴う地名の変転があった（現在の室蘭市街は明治初頭は「新室蘭」でした）事例、さらには、（これは比較的著名な例ですが）知床半島の「知床」のように、アイヌ語地名として指し示されていたのは、その半島の突端部の或る箇所だったものが、現在では半島全体の呼び名、さらにはより広域な地域名になっているケースもあります。現在の地理的・行政的区分に沿って現在の地名を配列する文献の場合、地名についての解説文の中で、これらのことを明確かつ丁寧に伝えないと、この問題が看過されるリスクがあります。しかし実際には、単純に「現在の地名」－「“嘗ての”アイヌ語での呼び名」－「そのアイヌ語の呼び名の解釈」という要素だけを列記する例も少なくありません。

難点のもう一つは、アイヌ語地名の場合、同型・同名・同類の地名を対比することによって、その地名のアイヌ語についてのより具体的な意味やニュアンス、さらには地域差が見えてくる場合が多いことです。

「知床（シレットコ）」はその典型例の一つで、現在の知床半島のほか、青森県下北半島の「知床」などをあわせて見ることによって、「シレットコ」が差し示す地形の特徴をより知ることができ、白老の「知床」のように陸上の丘陵部でもそう呼ばれる例を知ることによって、一時期流行した「知床＝地の果て」という説明が適切ではないことがよくわかります。また、「真駒内」（札幌市の「真駒内川」や、せたな町の「真駒内川」）、「マクベツ／マクンベツ」（十勝の「幕別」、白老町白老川下流の「マクンベツ」、石狩川河口近くの「マクンベツ」など）などは、アイヌ語「mak マク」に関わる語であり、この場合のmakは位置名詞であり、「(…の) 後ろ側」「(…の) 奥」「(海側に対しての) 山側」などの意だとされるものの、実際の地名の場合に、どちらから見てどちらを

「奥」「後ろ側」などとするのか、そこに一定の凡例的な要素や地域差があるのか、または特にそのようなものはないのか等は、各地の「マク」地名を対比することによって、はじめて検討することができます。

地域順に地名を配列している文献でも、著者がこうした点をよく知っている場合は、記述の中に一定の論及が見られる場合もありますが、無頓着に個々の地名を短く説明することに終始する場合や、対比・比較の論及が概括的なものにとどまる場合も少なくないので、ここにもう一つの課題があると言えると考えます。

いま述べた二つの難点を克服し得る記述のあり方として、実際の地名を地理的区分によって配列していくかたちではなく、アイヌ語地名に関する単語や語彙、語句を見出し語として立項し、先ずその語の語義や用例、地域差などを詳述することを中心とし、その上で具体的な地名の例を示していく、というかたちが有り得ます。知里真志保『地名アイヌ語小辞典』（楡書房、1956年）がその例です。同書のすぐれた点は、まさにここにあると言えます。

ただし、この叙述を為し得るためには、著者に相当なアイヌ語とアイヌ語地名に関する知見が求められるため、このような文献の例は他には極めて少なくなります。また、見出し語となった単語・語彙の説明が詳しかったとしても、著者が実際に各地の地名を実見し検証していかなければ、実際の地名の例示やそれらについての記述は、どうしても限定的になってしまいます。一方で、読者、特に一般の読者のニーズは、多くの場合、“実際の各地の地名”について知りたい、というところありがちなので、このタイプの文献は必ずしも多くの読者がきちんと受け止め得てくれない、という残念なことになりがちです。

1-3 山田秀三による地名研究の特色と意義

このような状況に対して、いま挙げたいずれの課題にも応えることができる、と申請者が考えるのが、アイヌ語地名研究の第一人者とされる山田秀三（1899～1992）の地名研究であり、それを支えた、地名調査の記録資料です。

山田秀三は当初、東北地方の地名にアイヌ語由来と考えられるものが多くあることに興味を持ち、それらがアイヌ語由来であるかどうかを確かめるために、東北地方の地名と、どれと同型・同類と推察でき、かつ、アイヌ語地名であることの蓋然性が高いと考えられる北海道の地名とをあわせて調査するところから研究を開始しています。すなわち、アイヌ語地名研究において有効ないし必要な、“各地の地名を実際に精査する”ことと、“同型・同類・同名の地名を対比していく”ことが、当初から研究姿勢・研究手法に備わっていたと言えると思います⁴。さらに言えば、上記のような山田秀三の研究の関心は、おのずと、アイヌ語地名について、単なる解釈を得ることに目標を置くのではなく、様々な地名に関する語彙・語句に関する理解を深めたり、地名の地域差や、それがアイヌ語地名であることを実証的・科学的に検証していこうとする姿勢に繋がったことも、調査の視点を深め、調査記録や著作における記述において、安易に結論を求めず慎重な検討を重ねていくことに繋がったと言えます。

実際、山田秀三のアイヌ語地名に関する最初の著作『東北と北海道のアイヌ語地名考』（楡書房、1957年）は、東北地方の地名を挙げて、その地名そのものについての現地調査を含む論及を軸に、東北・北海道の同名・同型・同類地名を挙げてそれらに論及していくかたちをとっています。具体例を一つ挙げますと、岩手県の「佐比内」など東北地方の「佐比内」をいとぐちとして、北海道の空知の「札比内」も含めた各地の「サヒナイ」「サッピナイ」について、文献・古地図の調査に加えて現地調査も重ねながら、それらの地名が「サッピナイ sat pi nay」（乾く・小石・川（沢））に由来する点で同類・同型の地名であることを確認していきます。そして、ここでいう「ピ」（小石）とは、川岸・川底が砂礫・小石を敷き詰めたようになっている様子をいい、「サッ」（乾く）とは、少雨期に干上がったようになる様子や、扇状地で川水が伏流する様子をいう、といった特徴を明らかにしていきます。同書は、この検討の過程に多くの記述を割いているところに特長があり、多くの地名を網羅したものではないですが、アイヌ語地名に関わるいくつかの語彙や語句について、その意味するもの、指し示す土地の特徴などを、丁寧な調査とその説明に基づいて実証的に解説している点で、アイヌ語地名に対する理解を深めてくれる内容となっています。

山田秀三の晩年の著作を収めた『東北 アイヌ語地名の研究』（草風館、1993年）に収録されている「サンナイ」などの地名に関する論文や、『アイヌ語地名の輪郭』（同、1995年）に収録された「アイヌ語地名の輪郭」も、これと同様の方法による論文であり、様々な地名についてこうした研究成果を著していることが山田秀三のアイヌ語地名研究の大きな特色の一つです。

もう一つ、山田秀三には、『北海道の川の名』（電通北海道支社、1971年）や『北海道の地名』（北海道新聞社、1984年、新装版は草風館、2000年）のような、川名や地名を地域ごとに配列し、それぞれについて解説していく、という構成の（言わば、多くのアイヌ語地名文献に通じる構成の）著作もあることが、その研究業績の特徴です。ただし、この2冊はいずれも、出版の依頼者（前者は北海道土木部河川課、後者は北海道新聞社）の企画によるものですので、このような構成は、おそらく、山田秀三の問題関心に内発するものではないと考えられます。しかしながら、山田秀三の研究の蓄積ゆえに、この2冊は、一つひとつの川名・地名についての解説が丁寧であること、その丁寧さは、特に、地名の解釈・語義を提示することよりも、具体的な資料と現地調査に基づいた検討の過程を説明することに注力することによっていることが大きな特徴です。これは山田秀三が採ってきた研究手法と、それによって積み上げてきた調査の蓄積によってこと為し得たものと言えます⁵。

本研究課題は、このような特色と意義を持つ山田秀三の地名研究の、その成果の蓄積であり数々の著作の淵源ともなっている、山田秀三による地名調査の記録資料を、その地名研究の手法に学びながら、アイヌ語地名の学習やさらなる研究のための情報資源として整備していく、そのための基盤構築を目指して、申請者らによる現地調査や、地名調査資料のデータベース化に助成金を活かさせていただくべく企画・申請したものです。

1-4 本研究課題の手法と手順

山田秀三が地名研究に用いた資料には文献（近世～近代の諸文献）や地図（近世のいわゆる古地図から近現代の地形図まで）があり、地名研究の過程で作成された記録資料には、上記の地図や文献への書き込み、写真、そして現地調査の際に作成された記録があります。

これらの中でも核となるのは現地調査の際の記録資料であり、そこに山田秀三の地名研究の特色が色濃く反映しています。山田秀三の地名調査の記録資料については、本研究助成の申請の際にも申請書に参考資料として添付して、概要を紹介しておりますが、研究成果報告に当たり、改めて本研究課題が採った方法・手順を説明するために必要な範囲で、この記録資料のなりたち（構造）と意義を述べさせていただきます。

（地名調査記録のなりたち） 山田秀三は、ある地域やある地名について考察を深めたいと考えて現地調査を企図したとき⁶、先ずその地域・地名に関する文献（特に古文献）、地図（特に古地図）を徹底して読み込み、それをノート（原稿用紙やルーズリーフなど）にまとめていきます。そのまとめ方は、文献の転記や抄録、地図の筆写やトレーシングペーパーを使った転写、あるいは地図そのものの一部を切り抜いての貼付などのほか、調べたい地名についての古文献・古地図の記述を一覧表形式で対比し、自身のコメントを付記する、近年の地形図に古地図・古文献の記載・記述を転記していき、1枚の地形図にそれらの情報を集約していく等の工夫が見られます。このことによって、このノートそのものがその地名に関する古文献・古地図の情報と山田秀三による予備的考察の集積・重なりになっています（参考図1）。

もちろん、他の地名研究者でも同様の作業を行っている（それは、申請者が知る現在の方々や、山田秀三の資料の中に含まれている他の地名研究者から送られた書簡や資料からも窺えます）ことではありますが、山田秀三の資料の特色は、先ず文献・古地図の集積のされ方が徹底していること（的確な文献・地図を網羅的に収集・熟覧しています）、その読み込みと考察が丁寧であること（古地図・文献の信頼性⁷に対する知見があり、検討の過程におけるアイヌ語の発音・語形の類推が適切な書誌的知識とアイヌ語に関する正確な知見に基づいていること、可能性の設定とその取捨選択の考察が科学的であること）などに特色があります。山田秀三は、「これだけの準備には、一日か二日の現地調査なら、一週間から半月かかる」⁸と述べており、準備に相当な時間の作業量を注力したことがうかがえます。

山田秀三による現地調査は、このような準備を踏まえて行われるので、どちらかと言えば入念に進めてきた予習の確認が中心であり、予習の中で、ここは現地で確認したいと考えていた地点や地形に関する現地情報の追補という性格を帯びたものとなります。多くの場合、乗用車（主にタクシー）を使い、準備の過程で作成した地形図を片手に、要所要所を見て確認していく、その中でいくつかの地点では車を降りて現地の様子を確かめ、土地の昔のようすを知る現地の人をつかまえて話を聞く……ということを繰り返していきます⁹。

現地調査から戻った直後から、その記録が作成されます。主に1970年代になって確立された体裁は、B5判の原稿用紙やルーズリーフ等を用い、これをいわゆるフラット

ファイルに綴じていくかたちで、用紙の片面、もしくは綴じた場合の見開きを一つのユニットとし、上に見出し的に地名や疑問点・検討する論点等をやや大きく記載し、その下に、現地の地図（自筆、地形図等からの転写、または地形図を切り抜いたもの）と現地で撮影した写真等を貼り、予習のなかで得ている知見や現地調査で得た知見を筆記していきます。その過程で、予習段階での検討に新たな知見が得られたりして検討が進んだところは、特に丁寧なメモが作られています。

1回の現地調査で、薄いものでは100ページ程度（用紙50枚程度）ですが、多くは150ページ前後、多いものは200ページ以上のボリュームがあります。また、調査に用いた地形図（そのほとんどは、予習の過程での書き込みなどが見られるもの）も、折り畳んで封筒などに収め、このファイルに同梱されています（ファイル1冊当たり5～10枚程度）。山田秀三の自筆の文字は読みやすく、地図もわかりやすく描かれています。また文章も平易であり、一般の利用者にも読みやすく、理解しやすい¹⁰文体なので、これらの資料を利用者が直接参照できるかたちが、アイヌ語地名を知り、学ぶに当たって適していると考えられます。（参考図2）

（地名調査記録の特色と活かし方） 上記で明らかなように、山田秀三による地名調査の記録資料の中でも、この地名調査の記録をまとめたファイル（以下「記録ファイル」とします）は、山田秀三による地名研究のエッセンスの集積であり、公刊された著作の基盤となるもの、著作の理解をより深めるものとして重要な意義を持ちます。何より、アイヌ語地名を知り・学ぶ上で重要な知見や方法が踏まえられた構成と内容となっています。

本研究課題では、アイヌ語地名を知り・学ぶための情報資源として、この山田秀三ならではの地名研究の特色と意義が詰まった記録ファイルを軸にし、記録ファイルのなかの個々の地名に関する記述（地図、写真なども含む）や、記録ファイルの中で展開されている同型・同類地名に関する考察などを利用者が任意に検索し、閲覧できるしくみづくりを目指しました。

記録ファイルは、北海道・東北地方に関するものだけでも約200冊あり、北海道はほぼ全域、東北地方も北東北（青森、秋田、岩手三県）を中心に多くの地域をカバーしています。将来的にはこれら全体をデータベース化できることが理想ですが、本研究課題は、その目標を見据えつつ、まずは地域的な特色やアイヌ語地名の学習にとってよいサンプルになりそうな地域を選び、データベースのモデルを試作・構築することを目標に据える、という計画としました。これまで申請者が勤務先（1994年から2014年度まで北海道立アイヌ民族文化研究センター、2015年度から北海道博物館）で進めてきた所蔵資料のデジタル化事業の中で、記録ファイルの本体部分は90%程度までデジタル化を終えていることを踏まえ、助成金を使わせていた限られた期間で実施することが有効と期待できるものとして、先ず限られた地域の記録ファイルによりデータベースのモデルを検討し、今後の拡充・利活用につなげていく、という計画です。

2 研究課題の実施経過（2020～22年）

2-1 当初の計画

本研究課題の基礎となるのは、記録ファイルのデジタル化と、その記録内容のデータ化（記録ファイルの内容を読み込み、総目次・細目次的なデータを取りまとめていくこと）です。上述のとおり、これについては2019年度の始めごろまでに、デジタル化については、記録ファイルの本体部分（ファイルの表紙・後表紙及びB5判の用紙を使った部分＝見開きA3判以内でスキャンできるもの）は全体の90%程度まで終了し、内容の確認も同程度まで進めておりました。この時点でデジタル化が残っていたのは記録ファイル約20冊と、地形図などやや大判の紙資料でした。

助成金申請を検討し始めた当初（2020年1～2月頃）は、①これらの記録ファイルのデジタル化や、記録ファイルのもとになっている古文書のデータ化等の、“助成金の採択如何にかかわらず進めておくべき作業”を進める ②サンプルで取り上げる地域を検討し、助成金の採択を得たら現地調査を開始する ③同じく、記録ファイルのデジタル化についても、助成金が採択されたら、これまで主に進めていた職員実行によるスキャン（A3判まで）では困難な、大判地形図のスキャン等に着手することを予定していました。

①～③をとおして検討したいと考えていたことが、本研究課題でも重要な作業となる、データベース構築のサンプルとする地域の選定でした。

当初は、山田秀三の地名研究の特色である同型・同類地名の対比を、山田秀三の研究の足跡にならって北海道と東北にまたがって行えるような選定を構想しておりました。例えば、山田秀三が長年にわたって各地を実見しながら考えをめぐらせ、1980年代後半になってようやく推察から実証へと検討を進めた、「サンナイ」「サンケナイ」などアイヌ語「サン san」（（水が）出る、（魚が）下る）などの意）や「サンケ sanke」（sanの使役形。「出す」などの意）に由来するとされる「珊内」（宗谷岬、積丹半島）「三毛内」（苫前町）「三内」（青森県青森市）を含む地域への調査ファイルや、「興部」（興部町）と「奥戸」（青森県大間町）、「白糠」（白糠町と青森県東通村）、「平取」（平取町）と「平尾鳥」（秋田県秋田市）などの地域の調査ファイルを候補としておりました。

2-2 2020年4月（申請前後）～10月（申請採択・助成金交付（9月）前後）

ところが、申請書作成・提出時（2020年3～4月初旬）には、1～2月頃から社会問題化してきた新型コロナウイルスによる感染症拡大が、北海道でも本格的な流行を見せるに至っておりました¹¹。ただ、この時点では諸般の見通しが不透明で、特に移動や出張については、この時点では、採択結果が出る夏以降であれば、対策を講じる等により実施できる可能性があるだろうと考え、申請時には、上記の候補地を念頭においた現地調査を比較的大きく位置付けた研究計画としておりました。

しかし4月中旬から感染の再拡大が始まり、その後は、周知のとおり、2020年度は見通しが不透明ななか、新型コロナウイルス感染拡大下の館運営のガイドラインを定め、特に広域移動の自粛が求められる状況になっていました。それでも数ヶ月先のことは未確定だと考え、本助成金の執行について、現地調査はいったん見合わせつつ、当面はデータ作成やデータ整理に作業を傾注することとした。いっぽうで、このよう

な不透明感ゆえに、データ作成・データ整理についても当面は本研究課題の助成金によらずに進めることとしました。

また、サンプルとする地域については、少なくとも当初に計画していたような道外調査を多く想定することは難しいと考え、再検討することとしました。

再検討現地調査は勤務先の経常予算によるものに限定し、上記の候補地のうち勤務先である北海道博物館からもっとも近い積丹半島地域に絞って実施しました。

2-3 2020年10月～2021年4月（中間報告提出＝5月12日付け まで）

新型コロナウイルス感染症の流行が長期化することが必至となったと感じられる中で、職員実行によるデータ作成・データ整理を継続しつつ、①本研究課題にかかる最初の現地調査（データベース作成に向けたサンプルとなる地域を検討するための調査）として十勝地方幕別町を選び、助成金による最初の現地調査を実施しました。幕別町を選んだのは、同町が同町関連の山田秀三資料を紹介する展示会の開催を企画したことによって、コロナ感染拡大下でも同町への出張・調査が行いやすかったことにもよりますが、帯広市に隣接する同町は、市街地・農村・山村のバリエーションがあり、1890年代からの一斉的な殖民地区画選定と移住者の大規模入植による土地の様相の大きな変化と地名の変化や、1930年代末における字地番改正など北海道に多く見られた地名改変を経験した地域であり、「幕別（マクンベツ）」という、道内の他の地域にも同型・同類の地名が多く見られる地名が所在すること、そして、幕別の調査が含まれている記録ファイルの中に「マクベツ」「マクンベツ」地名に関する比較・考察のページがあり、データベース化のサンプルとして適していると考えたことによります。

また、ここまで進めてきた記録ファイルに関するデータ作成・データ整理について、本研究課題による現地調査のデータとあわせて保管・整理するためのHDD等を調達しました。

このようなことで、2021年5月の中間報告の段階では、一定程度計画を組み替えたなかでデータの整理や検討はある程度進んでいること、しかし現地調査については現状において遅延しており今後も規模を縮小して進めざるを得ないことを踏まえ、データベースについてはひとまず当初計画の研究期間であるここまでの検討にもとづくテスト（試行）版を作ることを目指しつつ、貴財団に研究期間の延伸（最大で2022年4月頃ま）をお願いし、もし延伸できた場合は、2021年中に現地調査などをさらに若干重ねつつ、データベースの機能向上を図るようにしたい旨をお願いしたのでした。

2-3 2021年5月～2021年10月

幸いにして研究期間延伸についてご理解をいただけたので、研究計画の順序を組み替え、新たな現地調査は秋以降に実施することとし、一先ず既存のデータを使ったデータベースの、言わば試作版を検討することとしました。

具体的には上記2-2で実施した十勝地方の内陸部（幕別町）を中心とした地域の記録ファイルを素材とし、次のような構造を考えました。

- ① 基本的には、記録ファイルの各ページに見出し語ふう書かれている地名を立項する。（結果として、それぞれの記録ファイルについて、そのとき現地調査が

行われた地域の、数十～約 100 件の地名が立項される)

- ・その地名についての調査記録がしるされているページは、実際のどの地点での調査の記録なのか、現行の地形図にマークする
 - ・上記のマークと、記録ファイルの当該ページの画像データ（記録ファイルの内容を熟覧できる画像データ）をリンクさせる。
 - ・これを複数（ゆくゆくは全ての）記録ファイルについて作成していくことで、利用者は、「記録ファイルが対象としている地域ごとに地名とその調査記録を見ていく」ことと、「複数の地域にある、同型・同類の地名についての調査記録を、同時に／対比させながら見ていくことができる。
 - ・今後の展開として、それぞれの地名に関する山田秀三の著作ともリンクを設定し、実際の著作と、記録ファイルにおけるより詳細な観察記録や検討メモなどを対比して見るようにする。
- ② 記録ファイルの特徴である、「マクンベツ」のような他に同型・同類の地名がある場合で、記録ファイル内でまとまった分量の記述を割いて比較検討を行っているページについては、①のような具体的な地点へのリンクとは別に、1)そこで比較検討が行われている他の地域の地名の地点それぞれにもリンクを設定する
2)特定の地点へのリンクを貼らず、ダイレクトにその同型・同類地名に関するその録ファイルのページの画像が、他の地域での記録ファイルにおける同テーマのページへのリンクを設定する。
- ③ 記録ファイルの多くには、最初の2～4ページにかけて、そのときの現地調査を実施した経緯や調査の主たる目的、現地調査と日程と経路などが、山田秀三自らによってまとめられているので、これをその記録ファイルの概要記述や目次のなものとして位置付ける。（記録ファイルの画像データについて、上記①、②による「地名・地域の検索→閲覧」のほか、③による「記録ファイル（現地調査）概要の閲覧→ファイル全体の通覧（その地域の地名調査記録の通覧）」という二つの楽しみ方（閲覧方法）を用意する。

この検討をもとに、まずは記録ファイルのうち幕別町及びその近隣地域の調査記録を含む2冊について、申請者においてデータの整理や目次の立項などを行いつつ、データとのリンク設定については地図情報を取り扱う実績を有する事業者へ委託し、実際の調査地点をGISデータに反映させることや、地形図を現在のもの（最新のもの）にしたり、あるいは調査当時のもの（おおむね1970年代）のものにしたり、といった技術的な部分での検討・試作をお願いしました。

並行して、この試作版の充実・改善をはかるための現地調査などを計画し、同じ十勝管内幕別町から連続してデータをつくっていくことができる十勝地域を主たる対象とし、具体的には幕別町の南側に続く中札内、更別、大樹、広尾の各町村を中心に、適宜関連する、または参照すべき情報が期待できる地域での実施を計画しました。

（2021年度後半以降であれば、結果的にみれば、東北地方への調査も不可能ではなかったのですが、既に研究期間の開始から1年を経過している段階で新たな地域を対象

とすることは、さらなる延伸を伴いかねないと考え、本研究課題では上記の現地調査によって一定の達成を得るところまでを目標に据えることとしました。)

2-4 2021年10月下旬～2022年3月

上記の計画を踏まえ、現地調査と、その結果をもとにしたデータの整理とデータベースの検討を続けた時期です。

現地調査としては、幕別町を中心とした十勝地方、特に、「コイカ koyka」(一般的には(海沿いに)「東の方」などの意とされる)や「コイポク koypok」(海沿いに)「西の方」などの意とされる)という、いわゆる方位地名について、それが実際に指し示す実際の方位と、その地域差の有無についての検討(これは、山田秀三が晩年までこだわっていた論点の一つでした)が見られる広尾町への調査に重点を置きました。

幕別町は、町そのものが十勝川中流域の旧幕別町と、当縁川中・上流域の旧忠類村の合併により、南北に40kmほどもある多様な地理的条件を備えているので、この時期に、前述した「マクンベツ」のほか、「忠類」「モイワ」など様々な地名について調査を行いました。これに隣接する帯広市の東部や、中札内村、更別村、さらに南に続く大樹町と広尾町を調査の範囲に加え、小規模な府県の面積に匹敵する十勝地方中南部をデータベースの対象とする素地をつくることができました。

また、参考・参照すべき地域として、山田秀三の研究の中でも比較的良く知られる、北海道「静狩」と青森県下北の「尻労」胆振地方の対比を調査している長万部町での調査を行い、アイヌ語地名に関連する基礎的文献調査として、胆振・日高地方の調査記録の参考のため苫小牧市での調査を、山田秀三も頻繁に参照した『北海道蝦夷語地名解』(1891年)の著者である永田方正のその他の著作を調査するため函館市への出張を行いました。

これらと並行して、12月ごろから、上記2-3で作成したデータベース試作版について、①新たに、帯広から広尾に至る地域や、広尾から太平洋沿いに浦幌近隣までの地域のデータを加えていくこと ②上記の方位地名の検討に関する調査データを加え、こうした広く分布する地名語についての効果的なリンク設定のあり方を検討することを進め、2022年2～3月にデータベースの補充・改修を実施しました。

基本的な構造は、さまざまに検討を行ったものの、結果としては上記2-3で作成したものを踏襲することとしましたが、収録する地名・地域を大きく増やすことができました。

なお、本研究課題による現地調査を行う中で、現地調査の地元である広尾町の方々に山田秀三のアイヌ語地名調査資料に関心を持っていただくことができ、同町との共催で山田秀三資料の展示会を計画することができました。

ただし、コロナ感染のリスクが依然として残る中でもあったので、調整の結果、展示会開催を2024年6月とし、その開催までの期間のデータ整理等を本研究課題の実施期間とさせていただきたいと考え、上記中間報告においていったん延伸いただいた

研究期間の期限であります 2023 年 4 月に、あらためて中間報告を提出させていただき、本研究課題の実施期間を 2024 年 6 月までとさせていただくことをお願いした次第でございます。

なおこの間、本研究課題による記録ファイルのデータ整理等にかかる照会を通してやりとりのあった胆振地方の伊達市からも、同様の申し出があり、こちらは、2022 年 10 月に同市との共催で展示会を開催することができました。さらに、伊達市の展示会の情報を聞いた空知地方の美唄市からも開催の申し出をいただき、2023 年夏にやはり美唄市との共催による展示会を開催することができました。

展示会の開催経費についてはいずれも、共催先の市・町及び北海道博物館の事業費で実施したのですが、展示会開催に至った契機は間違い無く本事業における現地調査やデータベース構築をめぐる現地での相談などにあったものであり、展示における解説パネルの構成や記述内容にも、本研究事業における成果を活かすことができました¹²。

2-5 2022 年 4 月～2023 年 6 月

この時期は、3 月までに作成したデータベースについての、補足的な調査やデータの付加を検討しつつ進める作業を行いました。

その中で、河川名についてのやや複雑な事例が見られる胆振の伊達地方について補足調査を行ないました。(上記の伊達市での展示会開催の契機になったのは、ここに至るまでの事前の照会・折衝でした)

これらの準備を踏まえ、2024 年 6 月に、広尾町にて山田秀三資料の展示会を開催し、別記したとおり、地域の方々たいへん好評をいただきました。

以上をへて、本研究課題で追跡してきた、山田秀三の地名調査記録を、アイヌ語地名について知り・学ぶための情報資源として活かすための取り組みは、ひとまず、モデルとなるデータベースについて検討し、十勝中南部という一定の地域と、「マクンベツ」や方位地名などいくつかのアイヌ語地名の理解にとって重要な語彙についてのものを作成することができたことを踏まえ、今後さらなる拡充・整備の必要や、様々な利活用の方法の検討など、多くの課題や可能性はあるとしても、それらは改めての次なる作業・事業として企画すべきものと考え、中間報告後におゆるしいいただいた、「2024 年 6 月まで」をもって、本研究期間を終了することとしました。

3 本研究課題による到達点・成果と今後の課題

3-1 成果

本研究課題、とりわけ助成金をいただくことにより進めることができた成果としては、これまで述べたことの繰り返しとなりますが、

- ・山田秀三のアイヌ語地名研究資料についての、基礎的な整理の進捗よくを図ることができたこと。

・記録ファイルなどの資料のデータを活かすためのデータベースについて、その基本的な構造を検討し実際に作成することができ、またその後の検証等を行うことができたこと

が挙げられると考えております。

また、本助成金による調査を各地で行うことを通して、関係する諸地域の方々（図書館、博物館職員や地域の歴史・地理に関心を持つ方々）の関心を得ることができ、2022～24年という、未だコロナ下の影響が残る状況にもかかわらず、いくつかの地域で山田秀三資料の展示会を開催できたことも、本研究助成の副次的な効果、たまものと感じております。

3-2 課題

いっぽうで、課題として残っていることを敢えて挙げるとすれば、データの充実等の一般的に挙げられる諸点に加え、データベースにおいてGISを活用することの可否を改めて検討すべきかもしれない点があると認識しております。本事業では、助成金をいただいたこともあって、専門業者の知見を借りつつGISを活用したことで、ビジュアルなわかりやすさや、現在の地図情報への連携が進んだと自己評価しております。反面、このリンク設定のところに構築にかかる人工・経費のコストがかかったので、今後このデータベースを整備していくにあたっては、まずは立項する項目の選定のあり方や、項目と記録ファイルの画像とのリンクのあり方に作業を傾注することが、今回のように膨大なデータを整理する上では効率性はあるのではないかと考えています。

3-3 展望

それでも、今後の展望・可能性として、初心者でも読みやすく、長年にわたって研究してきた人たちにも読みごたえと刺激のある、山田秀三の地名調査の記録資料の、有効な利活用の方向性が見えてきたことは、本研究助成をいただいたことによって切り拓けた展望、確信です。この度の助成をいただき、足かけ2年間にわたり調査と試行錯誤を重ねることができたことに、改めて感謝申し上げます。

【脚註】

¹ 地名のかたちやその地名が指し示す対象が歴史の流れとともに変化することは、アイヌ語地名に限らず、どの社会・言語にも見られることです。しかしアイヌ語地名の場合、その変化がきわめて大きいこと、とりわけ、その変化が、ほとんどの場合において、アイヌ語地名を命名し、使ってきた当事者であるその地域のアイヌ民族を疎外するかたちで進めたことは、少なくとも近代日本において日本語由来の地名が歩んだ歴史との大きな違いであることは否めません。

そして銘記すべきは、近代以降の日本国内では、アイヌ語地名が濃密な北海道・北東北であっても、アイヌ語について断片的な知識しか持たない移住者がその地域の構成員の圧倒的多数を占めるに至っていること、これらの圧倒的多数者が、アイヌ語地名の改変の歴史についてしばしば無自覚であることです。さらに言えば、このことが、現代日本社会

におけるアイヌ語地名をめぐる関心のあり方が、もっぱら“その地名のももとのアイヌ語の呼び方とその意味”に向けられていて、いま述べてきたような地名の改変／喪失の歴史についての認識・関心は希薄であることにも繋がっていると考えられます。

いま「考えられます」と書いたとおり、上に述べたような意識や関心のあり方については、その根拠として実証的なデータを提示することは難しいのですが、申請者が北海道立アイヌ民族文化研究センター（1994～2015年3月）、北海道博物館（2015年4月～現在）に勤務してきた間に受けたアイヌ語地名に関する照会は、ほとんどが「その地名のももとのアイヌ語の呼び方とその意味」に終始するものであること、また、「札幌」「釧路」「帯広」「小樽」といった、比較的にな大きな都市（＝早くから和人の移住があり、かつ、早い段階で和人が圧倒的な多数者となった地域）であるほどに、“それらがアイヌ語地名であることは確実であるが、「ももとのアイヌ語の呼び方とその意味」はわからなくなっている”という、上述した歴史を踏まえて考えれば容易に推察可能なことが理解されていない（「札幌のような大都市／主要な都市であれば、地名の由来についても研究が進んでおり明らかなはず／明快な回答が得られるはずだ」と思われている）場合が多いことは、あくまで実感のレベルではありますが、有力な根拠となるものと考えています。

アイヌ語地名の人為的な改変の歴史については、これと不可分に進行した“忘却”の歴史に関する指摘ともども、山田伸一氏（元北海道開拓記念館・北海道博物館学芸員、現札幌学院大学教授）による「アイヌ語地名はどう書き換えられたか」（山田『近代北海道とアイヌ民族 一狩猟規制と土地問題一』北海道大学出版会、2011年）などの一連の研究が現在のところもっとも詳しく、かつ的確な視野による論述となっています。なお、この山田伸一氏の研究でも触れられていますが、やや仔細に地域の歴史に分け入ってみると、移住者たちが移住してきた当初のころは、何らかのかたちで移住者が暮らしの端々で先住して人々との関わりを持っており、それがアイヌ語地名に関する記憶ないしは記録となっていた場合も少なくないこともわかっています。上述した地名の改変・喪失とその過程に関する“忘却”の歴史は、こうした、移住者も共有できていたかもしれないアイヌ語地名の記憶が希薄化してきた歴史でもあると言えるのであり、だからこそ、記憶が「忘却」「希薄化」される過程を知ることの意味が重要であるとも申請者は考えています。

——ここまでこの脚註で述べてきたことは、本研究課題に直接関係することではありません。けれども敢えてここに書かせていただいたのは、一つは、こうしたことが申請者たちが目指す「アイヌ語地名について知る」ことの射程・視野あるいは視座として重要であること考えているからであり、もう一つは、山田秀三による地名研究調査の記録資料には、地名の改変・喪失に関する記録のみならず、「忘却」「希薄化」の歴史や、嘗てありえた地名やその記憶の共有に触れているところもあることが大きな特色であり、それが、本研究課題が山田秀三による調査資料をデータベースの基礎に据えたいと考えた所以の一つだからなのです。

² 同書の成立過程とりわけ永田による調査の詳細は、同書の「緒言」及び「例言」に記載されています。それによれば、実際に各地を廻れた時間は限られており、函館県在任時の調査にとどまった地域もあるということです。

³ アイヌ語地名に関する研究史のレビューとしては、高木崇世『北海道の地名関係文献目録』（サッポロ堂書店、2005年）、『同 新版』（サッポロ堂書店、2015年）がそれぞれの目録編さん当時までの文献をよく網羅しています。

⁴ 山田秀三の研究の足跡とその特長については、児島恭子「その先を見ていくために——山田秀三文庫資料の展覧会に寄せて——」『アイヌ語地名を歩く——山田秀三の地名研究から——』（北海道立アイヌ民族文化研究センター編、草風館発行、2005年）などに、要点がよくまとめられています。

⁵ このような山田秀三の地名研究の特徴については、服部四郎による指摘がよくその章

義をとらえていると思っています。服部「カラフト西海岸北部地名の共時論的研究」

(佐々木弘太郎『樺太アイヌ語地名小辞典』みやま書房、1980年所収))は、山田秀三の地名研究は、「微視的研究」(その地名についてのより正確性の高い検討)と「巨視的研究」(同型・同類の地名を悉皆的に調査し、微視的研究による見解を検証する)を高い水準で併用したことに大きな意義があるとしています。「微視的研究」において山田秀三が採った手法は、「古記録・古地図の悉皆的な調査によってアイヌ語による呼び名を可能な限り確かめる」「そのアイヌ語から推定される土地の様子等の地名の由来を、現地調査によって確かめる」というものであり、「巨視的研究」では、「その地名がアイヌ語に由来することがより高い確率で推定される北海道を中心として、その由来するとされるアイヌ語と同型・同類の地名や、その地名から推定される土地のようすが同型・同類である地名について、悉皆的に現地を確認し、微視的研究における成果(地名の由来や意味の分析)の妥当性を判断する、という手順が採られている、としています。本研究課題は、このような意義・特徴を持つ山田秀三の地名調査の記録資料を、アイヌ語地名を学習するための情報資源として活かすための基盤整備を目指すもの、と申請者は考えています。

⁶ 山田秀三は、地名研究を中心とした随筆集『アイヌ語地名を歩く』(北海道新聞社、1986年)の「あとがき」に、「私の調査手順概説」と副題を付け、自身の地名研究の手法と手順を丁寧に説明しており、現在でもアイヌ語地名研究の方法論についての有益な文章となっています。晩年と呼んでよい時期の書き下ろしの文章であること、本文よりも行間を詰めてびっしり書かれた文章の様子などから、山田秀三が敢えてこの文章をしるしておきたかった意思を申請者は感じています。本報告書の以下の記述も、山田秀三のこの文章に学びつつ、実際の資料に即して略述したものです。

⁷ 言わずもがな、のことですが、アイヌ語地名に関する古文献の筆者のほとんどは和人もしくは欧米人であり、筆者のアイヌ語に関する知見の程度を知っておくことや、アイヌ語のどの発音がどのような文字に表記されるのかの見極め、写本作成時におけるアイヌ語の転記ミスの可能性の見極め等は、資料批判の初歩的な要件です。

⁸ 前掲「あとがき—私の調査手順概説—」『アイヌ語地名を歩く』210ページ。

⁹ 山田秀三は長く北海道曹達株式会社の社長、会長、相談役をつとめていたので、現地調査は会社の休日に行われています。従って多くは一日のみ、会社の要職を退いた後は2日以上をかけた調査が稀に見られる、という程度です。現地調査は、基本的には総距離50~200km程度で廻れるコースで行われています。

¹⁰ 例えばアイヌ語には、名詞は所属形をとると形が変わること等の、アイヌ語地名を知り・学ぶ上で重要な文法上の決まりごとがいくつかありますが、山田秀三の書く文章は、こうした文法上の法則性などを「アイヌ語のくせ」と表現するなど、文法上の問題を正確に把握しつつ、言語学の専門用語に過度に頼らない記述になっています。

¹¹ 申請者の勤務する北海道博物館では、2020年2月に入って道内でも感染者が出始め、その後急速に拡大し、2月29日には博物館を臨時休館する事態となりました。しかし4月2日にはいったん再開(開館)するなど、4月初旬の時点では、なお中・長期的な見通しは曖昧で、本研究課題についても、採択の結果が出る秋以降であれば、北海道・東北への現地調査が実施できる可能性があると思込んでおりました(申請時には現地調査に大きく比重を置いた内容だったのはこのためです)。しかし4月中旬からの感染再拡大により再度の臨時休館を余儀なくされ、5月下旬に再開館に至ったものの、感染拡大防止ガイドラインを定め、諸般の業務もそのもとで行うこととなりました。

¹² 例えば本文で例示した「コイカ」「コイポク」について、広尾町内における実例と₁₅

て、「コイカクシ・ピロロ川」と「コイポククシ・ピロロ川」という川名が見られます。

従来の一般的なアイヌ語の理解では、前者が「東」、後者が「西」を意味します。しかし現在の実際の川名は、前者が「西広尾川」、後者が「東広尾川」と、言わば逆になっており、実際の川の並びも、どちらかといえばこのようになっているのです。

山田秀三によれば、この広尾の事例に触発されて「コイカ」「コイポク」のより実際的な意味・用例やその地域差の検討の必要を感じたとのことで、山田秀三は、そのための方法として、①各地の「コイカ」「コイポク」に関連する地名を網羅的に拾い上げ、それを地図に落とし込んでいく（全体を俯瞰し、分布や地域差を検討する素材をつくる）作業と、②具体的な地名を絞って、そこでの地名の位置関係や実際の意味などを検討するや検討する作業の両方を重ねています（脚註5で紹介した、服部四郎の指摘する方法上の特色が発揮された例と言えます）。

広尾町での地名調査を記録した記録ファイルにも、そのような検討のメモがたくさんしるされています。本研究課題において、実際の各地の調査記録ファイルの内容の再確認・整理に加え、申請者らも現地調査を行い、山田秀三による整理（この地域では、より釧路地方に近いほうが「コイカ」、その反対が「コイポク」という意で理解するとより実際に近い。すなわち、「コイカ」「コイポク」地名について、一般的なアイヌ語の語義にとらわれて機械的に「西」「東」の日本語訳を付けることで混乱が生じており、実際のアイヌ語の使われ方のニュアンスを知ることによって理解できる、ということになります）の妥当性を再確認することができました。

これらのことについては、本研究課題におけるデータベース内でもこのようなリンク設定に活かすとともに、本文で触れた、広尾町での展示会でも紹介させていただき、展示会の会期中に実施した講座でも、これが本研究課題の成果であることとあわせて紹介させていただきました。の点は、展示会や講座に会場いただいた地元の方々からも評価をいただいたポイントの一つでした。